

西大寺所蔵金銅透彫舍利容器小考—図像と儀礼を中心に—

森 香乃 (大阪大学)

奈良・西大寺が所蔵する金銅透彫舍利容器（以下、本作）は、宮殿形の独特な形状と華麗な透彫りが際立つ、日本の舍利荘厳美術を代表する作品のひとつである。本発表は、本作の制作年代に関する先行研究を整理したうえで、屋蓋に表された龍の図像および容器内に安置された塔鉢形合子について再検討するとともに、その使用儀礼について試案を述べるものである。

本作は、先行研究において、鎌倉時代に西大寺を中興した叡尊（一二〇一～九〇）による舍利信仰の影響が濃厚であることが指摘されてきた。特に近年の研究では、屋蓋に表された龍の図像をめぐって、中世の西大寺流寺院にも及んでいた醍醐三流における「如意輪宝珠法」の舍利観の影響が認められることが指摘されている。本発表では、その龍の図像を改めて検討し、瓶を傾けて水を流す姿が祈雨に関する絵画にしばしばみられる龍神と共通することに注目する。そのうえで、如意輪宝珠法はその源流を請雨経法の龍神信仰に求められるという指摘を踏まえ、本作における祈雨に関わる図像の採用が、本作の背景にある如意輪宝珠法の舍利観に基づくものである可能性を提示する。

本作の宮殿形外容器内に安置される塔鉢形合子については、先行研究ではその形状が奈良時代に香入れとして使用された塔鉢に類似することから復古的な要素との解釈が定着している。しかし、その形状は平安時代以降の曼荼羅に描かれた相輪蓋を持つ宝瓶とも類似していることは看過できない。中世西大寺流では種々の宝瓶を模した能作性塔が盛んに制作されていた。だとすれば、本作に安置された合子は曼荼羅中にみられる宝瓶を模した能作性塔と解釈することができ、舍利と宝珠を同体と捉える真言密教の舍利観に基づく制作であったとみることができるだろう。

本作は、基壇内部の修理墨書銘により、もとは奈良・大安寺に伝来したことが判明している。そのことを踏まえ、中世大安寺の文献史料の分析を通して、本作を使用した儀礼について検討を試みる。『大安寺年中行事次第法式』（以下、『次第法式』）正月八日条には「七晝夜不断如意輪陀羅尼」との記述がある。詳細は不明ながら、その記述により正月八日から七日間不断に如意輪陀羅尼を唱えるものであったと推測される。中世西大寺においても正月八日から七晝夜不断に如意宝珠の陀羅尼を唱える年中行事「如意宝輪華法」が修されていたことが知られるが、これと類似する行事であったことは明らかであろう。西大寺の如意宝輪華法では如意輪を象徴する密観宝珠の脇侍に不動・愛染を置いた三尊形式の作品が使用された可能性が指摘されている。それに対して、大安寺の「七晝夜不断如意輪陀羅尼」においては、如意輪宝珠法の舍利観の影響が認められる本作が使用された可能性を提示する。さらに、この儀礼が大安寺で修された理由を探るとともに、想定される儀礼空間についても言及したい。